

選者 川口孤舟

出席者 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤とみ子 佐藤ただしげ

在間千恵 豊田ゆたか 西澤國護 長谷見敏 星田啓子

投句・選句 伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 高橋康敏(新人) 土谷堂哉 中川雅夫

福島正明 古田昇 宮内規雄 山田けい子 山内天牛 山崎亜也 渡邊盛雄

選句のみ 重枝孝岳 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 山本三恵

《互選句》○は選者の特選 ◎は孤舟選者の選

九点 分校はみんなが主役島の春 孤舟 (紀・忠・健・○と・龍・恵・正・規・天)

八点 ◎地球とは宇宙の涙春の塵 正明 (紀・忠・孤・た・び・啓・亜・三)

七点 墨染の僧の過ぎ行く花菜道 孤舟 (紀・恵・敏・康・堂・昇・天)

◎車棄てペダル漕ぐ日々春の雲 健介 (紀・孤・ゆ・啓・亜・け・盛)

ゲルニカの叫びか遠き春の雷 昇 (○そ・紀・び・允・正・啓・規)

六点 ◎芍薬のつぼみ膨らみ紅仄か そらお (紀・孤・五・孝・敏・規)

春暁や夢の名残にもうひと寝 忠彦 (紀・千・孝・龍・允・盛)

虚弱児でありしが莞爾と卒業す 堂哉 (健・と・○忠・恵・昇・盛)

◎鉄橋をくぐり海へと花筏 びん (孤・五・恵・雅・亜・け)

四月尽院閉ず医師と長話し 天牛 (紀・忠・○健・龍・び・亜)

◎天空は隣り合わせや黄砂降る 盛雄 (紀・孤・五・堂・ゆ・び)

旅路とて知覧は悲し昭和の日 全 (紀・そ・ゆ・敏・隆・け)

五点 ◎母の忌や寺の桜は濡れそぼつ 千恵 (紀・そ・孤・び・啓)

思い出の写真少なく卒業す ただしげ (紀・忠・千・國・隆)

◎窓ガラス磨き春愁かるくせり とみ子 (紀・孤・康・堂・雅)

◎風受けて馬酔木の鈴の鳴りにけり 康敏 (紀・孤・隆・け・三)

馬の仔の手の鳴る方に歩み寄る 昇 (紀・健・千・康・三)

四点 残雪の一軒宿に真夜咆吼 紀久男 (忠・龍・○盛・三)

入学の孫より親が輝けり 忠彦 (紀・健・た・正)

恋猫の関西弁と津軽弁 孤舟 (紀・忠・恵・亜)

葉桜や葉は濃く淡く木漏れ日に 千恵 (紀・た・○國・規)

花冷や静かに閉づるマタイ伝 康敏 (紀・敏・昇・啓)

朝桜登り来る緋の袴 全 (紀・敏・允・啓)

太平洋岬に立てば春が行く ゆたか (五・孝・允・三)

黒海の民草むざん鳥雲に びん (紀・五・ゆ・○昇)

葉桜へ変化の速さ人の世も 正明 (千・た・孝・敏)

上る上る螢の幼虫用水路
春風や動乱の夜を遠く見て
目刺焼き白粥を食ぶダイヤ婚
争いの地にも大きな春の月

啓子 (紀・五・雅・び)
規雄 (と・び・允・け)
盛雄 (紀・と・龍・〇堂)
けい子 (敏・ゆ・規・天)

二点

新緑の柳連なる西湖畔

(杭州の思い出)

父母の忌や住職父子と花見酒

紀久男 (堂・隆・盛)

新高湯温泉(米沢)

雨音に強弱のある穀雨かな

孤舟 (健・恵・龍)

春芝居稲荷に手打つ佳人あり

五郎太 (そ・紀・と)

うかうかと従心過ぎぬ樟若葉

とみ子 (〇五・雅・〇啓)

清流の岩に腰掛け春惜しむ

ゆたか (千・た・國)

落花舞う出湯に癒す身と心

全 (紀・そ・〇允)

◎新緑に映える湧き水神田川

全 (紀・孤・康)

紅と白街路を染める花みずき

全 (紀・雅・隆)

石楠花を背負ふ縁側定石本

啓子 (紀・康・〇三)

目覚しの無きこの朝の百千鳥

全 (紀・千・た)

剥落の土塀粧ふ紫木蓮

びん (紀・孝・昇)

餅背負ひ泣いてよちよち桜鯛

けい子 (紀・た・堂)

(年餅を背負わせて歩き初めの一歳児の祝をする関西の行事のこと)

プーチンの首をとつたと万愚節

天牛 (紀・正・規)

二点

猿之助・愛之助らの「天一坊」

沙翁劇に紛ふ問答清明なり

紀久男 (と・敏)

水温む原発岬に風車増ゆ

全 (恵・〇正)

サーカスが来る桜祭り懐かしく

忠彦 (紀・〇孝)

妻の留守長閑に句集眺めけり

全 (紀・隆)

逝く春やいつもの店は定休日

五郎太 (紀・亜)

春法事十代もゐて賑やかに

全 (紀・そ)

この線で蚕紙運びし花ぐもり

全 (紀・正)

「行つてきます」写真に手を振り春の句会

とみ子 (紀・け)

鯉幟をのこの月の到来す

全 (紀・健)

春眠や夢で会いましょ亡き母に

千恵 (紀・國)

露店なく人も静かに花見かな

ただしげ (ゆ・雅)

なす術(すべ)の無きこと数多菜種梅雨

恵洲 (紀・正)

花筏芭蕉ゆかりの神田川

堂哉 (康・昇)

桜散る川面に遊ぶ鳥魚

ゆたか (紀・た)

牡丹咲き鳥来て歌う花賛歌

全 (紀・敏)

木蓮のやわらかに散る老の庭

雅夫 (紀・孝)

おおはしやぎ孫の両手に桜もち

國護 (紀・天)

愛犬の墓に舞い散る梅の花

全 (そ・康)

春の潮四十余人の島洗ふ
 花過ぎて寢(やつ)れし家にブルドーザー
 戸惑ひて涙は苦(にが)し臙月
 はつとして見上ぐる空や初燕
 ◎かわず鳴く雨だれの音と香を聞く
 荷風好く亡父は忌日同じうす

びん (紀・亜)
 啓子 (紀・隆)
 全 (紀・天)
 規雄 (紀・天)
 けい子 (紀・孤)
 亜也 (紀・〇龍)

一点

秘湯巡るみちのくドライブ遅桜
 昭和の日昭和も遠くなりにつけり
 春の空濡らして小川流れゆく
 戦ひとインフレーション暮の春
 轉をとほくに稚児ら練りだせり
 太平洋春風頼みの一人旅
 老木も万朶もありて花らんまん
 穂の芽に帆立合わせるレシピ鮮

紀久男 (盛)
 忠彦 (紀)
 孤舟 (紀)
 五郎太 (紀)
 とみ子 (紀)
 健介 (紀)
 千恵 (紀)
 全 (紀)

松尾芸能賞新人賞を祝し

大和屋に新人賞や花開く
 小雨降りひんやりとして春障子
 我が母の白寿祝うや夏近し
 珍しき苗字の表札花みづき
 弥陀ヶ原残雪に懐う我祖郷
 初恋の面影偲ぶすみれ草
 蜜蜂の羽音遠のき日の暮れる
 紅枝垂バツクに踊る子自撮りにて

ただしげ (〇紀)
 全 (紀)
 全 (紀)
 恵洲 (紀)
 雅夫 (紀)
 國護 (紀)
 びん (紀)
 亜也 (紀)

※※※※※

【句評】

九点句

分校はみんなが主役島の春 孤舟
 とみ子さん・・・やさしい言葉で多くの場面を読者に想像させる力のあるお句。
 恵洲さん・・・小さな学校の気心知れた同士の和気あいあいの雰囲気、さもあいな
 ん。
 天牛さん・・・数人の子どものたちの貌が見えるようです。

八点句

地球とは宇宙の涙春の塵 正明
 忠彦さん・・・昔から戦争や天災・事故で泣く事が多い地球を涙で表現され感服し
 ました。塵で捻ったところが面白い。
 孤舟さん・・・類想句がありそうだが、ウクライナ情勢を踏まえた昨今、「涙」は
 初出であろう。
 啓子さん・・・この銀河系にはかにない命を育む奇蹟の星、地球。この21世紀に
 なっても各地での内戦、戦争までもが勃発する。十七音でそこにあ

る命、歴史、数多くある問題を想起させて深い。
びんさん・・・壮麗な大景でよいリズムです。でも「宇宙の涙」の実体が掴みに
くい。「地球とは宇宙の塵か春愁う」では。
亜也さん・・・壮大さと悲しみと…。

七点句

墨染の僧の過ぎ行く花菜道

孤舟

恵洲さん・・・何とも長閑な春の景色をそのまま素直に写生した感じに好感。
康敏さん・・・一面の黄色の中を動いて行く一点の黒、コントラストの美しさに
堂哉さん・・・綺麗な景色です。
天牛さん・・・お彼岸で檀家廻りをしているのででしょうか。

車棄てペダル漕ぐ日々春の雲

健介

孤舟さん・・・池袋の旧官僚の事故を教訓に、私も五月の免許更新をせず廃車を
決意した。

亜也さん・・・淡々とした述懐の持つ味。

けい子さん・・・車棄てると気持ち良いですね。自転車も気を付けてください。

盛雄さん・・・免許返上し愛車と別れての日々、そして自転車での移動。下五の
春の雲がいいですね。

六点句

芍薬のつぼみ膨らみ紅仄か

そらお

孤舟さん・・・白い芍薬のつもりが、蕾は仄かな紅色だ。

白牡丹といふといへども紅ほのか 高浜虚子

春暁や夢の名残にもうひと寝

忠彦

盛雄さん・・・春眠暁を覚えず、気持ち良く通じます。

虚弱児でありしが莞爾と卒業す

堂哉

忠彦さん・・・親御さんの気持ちででしょうか、良く表現された句と思います。
完爾（にこやかに微笑むさま）の言葉が重く感じられました。
とみ子さん・・・無事ご卒業されて何よりです。完爾という私には難しい字で一休止
ありゆつくりと鑑賞できました。

恵洲さん・・・心より卒業おめでとう、と言いたい。

鉄橋をくぐり海へと花筏

びん

孤舟さん・・・海に近い桜の名所のお濠端。特別姿の良い花筏を発見。その流れる
ままに鉄橋を潜り終には河口までついて行った。

恵洲さん・・・スケールの大きい花筏ですね。目黒川などより大分大河の感。

四月尽院閉ず医師と長話し

天牛

健介さん・・・同様の経験あり、患者、医師ともに老齢化のまったただ中ですね。
びんさん・・・四月尽・院閉ず・医師と長話し…悲哀の情はよく分かります。
でもこれではぶつぶつと三段切れになるので、「院閉づる医師と語り
つ四月尽く」では。

天空は隣り合わせや黄砂降る

盛雄

孤舟さん・・・中国とは海で隔てられているが、確かに空では繋がっている。そし
て黄砂は容赦なく飛んでくる。

堂哉さん・・・毎年、悩まされます。かの国の人々はそんな悩みは知らないので

しようね！

旅路とて知覧は悲し昭和の日

盛雄

敏郎さん・・・何回か訪れた知覧は間違いなく「昭和」を想い起す聖地であろう。
隆さん・・・実家から直線で15kmに旧知覧特攻基地記念館がある。一度は訪問してほしい。

※尚、7月3日(日)まで、新宿住友ビル3階、平和祈念展示資料館
(都庁前、03-5323-8709)にて、鹿児島県知覧特攻平和会館所蔵、
特攻隊員からの家族や恋人に宛てた手紙や遺書などをエピソードと
ともに紹介している由、隆さんから編集子宛情報頂きました。

五点句

母の忌や寺の桜は濡れそぼつ

千恵

孤舟さん・・・菩提寺の満開の桜は生憎雨の中。作者も母恋しさの泪が溢れる。

思い出の写真少なくて卒業す

ただしげ

忠彦さん・・・孫が今年卒園で、幼稚園の数々の行事が取りやめになり思い出に
なる写真が無く寂しい思いをしました。

千恵さん・・・長引くコロナ下で多くの小中高生たちの学校生活は制限され楽しい
はずの学校行事はなくなり思い出つくりも出来なかつたと想像しま
す。又小さい子供たちのマスク姿にも同情を禁じえません。

隆さん・・・感染病コロナ時代が2年間。空白の時代とも云える。

窓ガラス磨き春愁かるくせり

とみ子

孤舟さん・・・春だからこそ感じるそこはかかない愁い・哀しみを胸に抱きながら、
窓ガラスを心を込めて磨いたら、その愁いがいっぺんに晴れたような気持ち
だ。

康敏さん・・・春愁は難しい季語だが上手く纏まっていると思う。

堂哉さん・・・確かに、掃除することは精神的に良いですね！リビングのガラスを
拭いて、庭の緑が輝いて見えたときは、一度に気分がすっきりしま
した。

風受けて馬酔木の鈴の鳴りにけり

康敏

孤舟さん・・・鈴蘭の花を「鈴」に譬えるのは当たり前だが、馬酔木のびっしりと
咲く壺状の小花を「鈴」と捉えて見事。

隆さん・・・狐につままれた感じがした。確かに鈴の形をしている。

馬の仔の手の鳴る方に歩み寄る

昇

康敏さん・・・手の鳴る方へ来るのは鬼さんばかりでは無いようだ、可愛い仔馬
も。

四点句

新高湯温泉(米沢)

残雪の一軒宿に真夜咆吼

紀久男

盛雄さん・・・真夜中に獣の鳴き声、自分らのテリトリーに人間が押し入った不満
の咆哮でしょうか。新高湯温泉(米沢)への一人吟行？

紀久男(自解)・・・恐ろしい今迄聴いたこともない吠え声で約30分ほど。正にけだ
ものを実感。夜の帝王の貫禄ありました。同行した相棒は白河夜
舟。翌朝宿の番頭さん二人に訊きましたが、人を襲いませんから
と、平気でした。

入学の孫より親が輝けり

忠彦

ただしげさん・・・コロナ禍もあつて、親の出席する行事が減っており、入学式は親が華美になる傾向が見受けられる。

恋猫の関西弁と津軽弁

孤舟

恵洲さん・・・恋猫のうるさいやりとりを、関西弁と津軽弁に例えた奇想を買う。亜也さん・・・猫の声を聴き分ける作者の耳に驚嘆。

葉桜や葉は濃く淡く木漏れ日に

千恵

國護さん・・・木漏れ日この情景が私の近くとぴったりで大いに感じ入りました。

花冷や静かに閉づるマタイ伝

康敏

敏郎さん・・・例えばバツハの「マタイ受難曲」あの柔らかな響は花冷えと共に心も癒してくれるのであろう。

朝桜登り来る緋の袴

康敏

啓子さん・・・早朝の神社詣り。光の中で散り始めた桜の中を、石段を上る巫女さんの装束が印象的。日本の美しい景のひとつと思えます。

紀久男・・・見頃の桜と石段を上ってくる卒業式の女学生の対比が目には浮かんできます。

黒海の民草むざん鳥雲に

びん

五郎太さん・・・外に開け様々な人が住む黒海。そこも攻撃されています。民草むざん、古の源平の乱をも思わせる上手な表現だと思いました。

昇さん・・・ウクライナを追われる無辜の避難民の幸運を切に祈ります。

葉桜へ変化の速さ人の世も

正明

ただしげさん・・・桜祭りが中止になったり、雨が多かったりするといつの間にか葉桜となり、人の世の移ろいの速さと同じものを感じる。

敏郎さん・・・実感です。

上る上る蛍の幼虫用水路

啓子

五郎太さん・・・珍しい景を頂きました。あまり俳句らしくないのですが。

目刺焼き白粥を食ぶダイヤ婚

盛雄

とみ子さん・・・ダイヤモンド婚を迎えられお祝い申し上げます。

堂哉さん・・・おめでとうございます！目刺しを楽しめる歯の丈夫なお二人です

ね！熱い粥に目刺しと何か漬物、幸せです

争いの地にも大きな春の月

けい子

天牛さん・・・我かんせずと人間の争いを無視しているお月様。

三点句

新緑の柳連なる西湖畔

そらお

(杭州の思い出)

堂哉さん・・・行ったことはありませんが、テレビで見た綺麗な景色を思い出しました。

父母の忌や住職父子と花見酒

紀久男

堂哉さん・・・檀家と住職との語らいなども、段々失なわれて行くようです。善き日常として残してゆきたいものです。

隆さん・・・両親のお世話、見送りは一仕事。ご苦労過ぎて至福のときか。

父母も住職の語る思い出話に微笑んでいるかも。

盛雄さん・・・菩提寺の住職と一献。ご両親はさぞかし喜ばれたことでしょう。
雨音に強弱のある穀雨かな 孤舟

惠洲さん・・・どうと言うことのないともいえる情景だが、よく気がつかれた。
龍平さん・・・季節の程よい音階の変化。

春芝居稲荷に手打つ佳人あり 五郎太

紀久男・・・鼻唄役者の上達を祈るお稲荷さんは演舞場や明治座など各地芝居小屋につきものです。

うかうかと従心過ぎぬ樟若葉 とみ子

五郎太さん・・・くすのきは二百年経った大木でも実に鮮やかな若葉を出します。
七十歳になつて好きなことをやる、これからでしょう。

清流の岩に腰掛け春惜しむ ゆたか

ただしげさん・・・都会の喧騒を離れ、すがすがしい感じを上手く表現している。
落花舞う出湯に癒す身と心 ゆたか

允章さん・・・長い籠り居の私にとつては羨ましいかぎりです、一日も早くどこかの温泉へ行きたい思いです。

新緑に映える湧き水神田川 國護

康敏さん・・・湧水に煌めく新緑、井の頭公園ひょうたん池の神田川の源泉だろう。
孤舟さん・・・井之頭公園の湧き水を源流とする神田川は、新緑のなか滔々と

流れ東京湾に注ぐ。

紅と白街路を染める花みずき 國護

隆さん・・・狛江市（東京）公園通りの街路樹も紅白の花水木が交互に続いて見事。

石楠花を背負ふ縁側定石本 啓子

康敏さん・・・石楠花が咲く庭を背に囲碁の研究。縁側と碁で秀囲気が感じられる。
目覚しの無きこの朝の百千鳥 啓子

千恵さん・・・小鳥たちの声で目覚めるとは何とも幸せな気分になりますね。
特に普段から目覚まし生活の人にとっては格別です。

ただしげさん・・・鳥の声で目を覚ます、ほのぼのとした朝の情景が楽しい。

剥落の土塀粧ふ紫木蓮 びん

紀久男・・・崩れた土塀は観光客の少ない奈良の寺に見かけますが、鎌倉でも同様でしょうか。

餅背負ひ泣いてよちよち桜鯛 けい子

(年餅を背負わせて歩き初めの一歳児の祝をする関西の行事のこと)
ただしげさん・・・昔の田舎の風習を上手く捉えていて懐かしく、下五の桜鯛で祝い

事と言うことがよく分る。

堂哉さん・・・聞いたことはありますが、身内でやったことはありません。善き風習ですね！

二点句

猿之助・愛之助らの『天一坊』
沙翁劇に紛ふ問答清明なり

紀久男

とみ子さん・・・シェイクスピア劇にも歌舞伎にも造詣の深い方が詠まれたのでしよう。
天一坊のお芝居が見たくなりました。

敏郎さん・・・インテリ猿之助らが演じる「天一坊」は確かに沙翁劇に通じる清明さがある！

水温む原発岬に風車増ゆ

紀久男

惠洲さん・・・原発と再生可能エネルギーの共存。風車ががんばれ。

正明さん・・・皮肉ですね。それにしてもロシア軍はチェルノブイリに弾丸を撃ち込むなんて！今回はウクライナ関係の句が多かったです。悲しいですね。

紀久男（自解）・・・御前崎の浜岡原発は防波堤を高くしたんですが風下の町の反対で廃止になっております。

サーカスが来る桜祭り懐かしく

忠彦

孝岳さん・・・少年の頃、故郷にきたサーカスの曲芸の少女に恋した頃を懐かしく思い出させて貰いました。「美しき天然」が聞こえてくるようです。

妻の留守長閑に句集眺めけり

忠彦

隆さん・・・俳句は「文字。想像は無限。句集を戦場に持参した出陣学徒も多い。「行つてきます」写真に手を振り春の句会」とみ子

紀久男・・・亡き主人に代わって出席された作者の気持ちが伝わって来ました。春眠や夢で会いましょ亡き母に

千恵

紀久男・・・中七の表現に中村八大の「スター誕生」を想い出しました。大阪の独身時代の懐かしい思い出です。

花筏芭蕉ゆかりの神田川

堂哉

康敏さん・・・流れゆく花筏に、若い頃土木技師としてこの川の工事に関わった芭蕉を偲ぶ。

桜散る川面に遊ぶ鳥魚

ゆたか

ただしげさん・・・漸く春を迎えそのほのぼのとした感じを上手く表現している。

牡丹咲き鳥来て歌う花賛歌

ゆたか

敏郎さん・・・江戸期の豪華絢爛花鳥絵の名手伊藤若冲の世界！！
おおはしやぎ孫の両手に桜もち

國護

天牛さん・・・実感がこもっています。うまいですね。
愛犬の墓に舞い散る梅の花

國護

そらおさん・・・自家の庭先に眠る「花子」（享年14歳のゴールデンリトリーバー）の在りし日を思い出しました。

康敏さん・・・舞い散る梅の花が一層亡くなった愛犬への思いを強くする。

花過ぎて簾（やつ）れし家にブルドーザー

啓子

隆さん・・・花の散るを待つて解体作業。解体日程にも情けか。
戸惑ひて涙は苦（にが）し臘月

啓子

天牛さん・・・苦い涙がいいですね！！
はつとして見上ぐる空や初燕

規雄

天牛さん・・・「はつとして」がいいですね。その通りですからね。
かわず鳴く雨だれの音と香を聞く

けい子

孤舟さん・・・「聞くもの」を三つ取り揃えた手柄。確かに「香」も「聞く」もの。

荷風好く亡父は忌日同じうす

亜也

龍平さん・・・洒脱な父上でしたか？ 私は1956年大学入ったが希望の寮に入れず
ポート部の空き室に潜り込み暫く浅草の艇庫に出向いて人目を避け
た。先輩たちがこの辺は荷風がよく通ると言っていたが出会う事は
無かった。|| 耽美派||なんて今でも居られますかね。まあ凄い人
でした。

紀久男・・・荷風を嫌う人も居られますが私は彼の俳句も含め愛好家のひとり、
雷門の尾張屋（蕎麦と天井。浅草寺御用達）に定席の椅子とポート
レートが置いてあります。

一点

秘湯巡るみちのくドライブ遅桜

紀久男

盛雄さん・・・コロナ禍の自粛の中、山深い秘湯に出向き遅桜を鑑賞できた悦び。
羨ましい限り。

春の空濡らして小川流れゆく

孤舟

紀久男・・・中七の表現が非常に面白い。

松尾芸能賞新人賞を祝し

大和屋に新人賞や花開く

ただしげ

紀久男・・・三津五郎の遺児、巳之助はマネジャーの古澤さんの指導宜しきを得
て、踊り（坂東流家元。名取・師範免許状などを啓子さんが勘亭流
で筆耕）も芝居も順調に腕を上げており、俳句を手掛けるのはまだ先
になりそうです。



青葉会予定

令和四年五月二十六日（木） 井の頭公園吟行 十時半～十七時 （雨天決行）

待ち合わせ：十時半：JR・井の頭線吉祥寺駅公園口 下りエスカレーター下りた辺り

句会 会 十三時半～十七時 於：御殿山コミュニティセンター

【句会場：御殿山コミュニティセンター】 ☎0422-48-9309

所在地：武蔵野市御殿山1丁目5番11号（JR・井の頭線ともに吉祥寺駅より徒歩3分）

◇参加者は吟行時の句含み当季雑詠5句。投句は2句まで。投句締切：五月二十四日（火）中。
参加のご意向、ご投句のご連絡は：今井宛FAXか郵送、或いは星田メール

(keiko-reve@c07.itscom.net) までお願い致します。

郵便は三日かかります（土日の配達はないので）注意を！



青葉会報

一、今回は新人の登美子（とみ子さん）、國護さん、久しぶりの忠彦さん含め2名が出席。投句
は新人と云ってもベテランの康敏さんら13名。三軒茶屋駅前の公民館は交通至便で使い勝
手も良いのですが、申込作業はどの公民館でも同様に抽選などで些か苦勞かけることになっ

ています。方向音痴の私が会場に一寸遅れて入りますと、皆さんお揃いで机を並べ、中央には日本酒、缶ビール、つまみ、和菓子等が並んでおり、皆さまの意欲の程が知られます。司会の五郎太さんのあざやかな捌きで句会は進み、ご覧のように孤舟さん、健介さん、正明さん、昇さんが高得点でした。

△寄贈①庄司龍平さんのご次男らが兵庫県の田圃で山田錦の米造りから、富久錦酒造で酒造りまで手がけた大吟醸「朔」②啓子さんから信州諏訪の純吟「真澄」とつまみ③千恵さんから飛騨高山の純吟「蓬萊」④國護さんから缶ビール⑤とみ子さんから鶴屋八幡（大阪・今橋）の最中「百楽」

△回覧△青葉会合同句集 200 回記念 300 回記念 400 回記念

二、関係者近詠

白息を尽くしアーマンと歌ひ終ふ 眞希子 朝敵の蝦夷（えみし）の裔の鬼やらひ 陽亮
産月の祈りにぬくし札拝堂 全 芽柳の水面恋ふるは神代より 全
ウィルスと共生ありや梅蕾 全 相生の松を真白にわかれ雪 全
エプロンで手を拭く癖を笑ふ雛 全 雪明かり黄泉平坂うつすらと 全
寒晴やこつこつ響く喪のヒール 弘子 数合せの一句巻頭春の雷 全
喪帰りの襟巻きちと巻き締むる 全 会津・伊丹等
噴きやすきひとりの土鍋小豆粥 全 初荷来る天下の美祿勢揃ひ 紀久男
盆梅に足跡の無き雪の原 全 接種了へ春めく神戸寺社巡り 全
嬰の爪ほどの花片を寒桜 全 孫三人の合格祈る鎮守様 全

——「森の座」五月号（横澤放川選）

つつがなく生きて米寿や茄子を植う 盛雄 桜笑む無位無冠なるやつがれに 健介
病抜け日々好日に菊挿芽 全 芽柳の酒蔵に寄りて句の席へ 紀久男
満願の高野ひねもす春の雲 全 女子大の枝垂満開句座急ぐ 全
春の雲じつと見上げて妻入院 健介 ウクライナを戦車で侵攻春寒し 全
芽柳や川面流るるぬいぐるみ 全

——「きさらぎ句会」四月

花筏自在に形変えながら 允章 鯉はねる紺のあじさい折戸川 秋元 宏
白蝶のごと豌豆の花ゆれて 全 全 （紫陽花を描いた絵葉書）
卯の花や故里遠く友いかに 全

三、孤舟選者近詠

ふくろふの頸を廻せば闇動く
炉の炭をついで返事を洩る父
灯の点り箴音漏るる雁木道
鉄瓶の滾る囲炉裏の嬾座かな
介錯は斯くなるものか落椿

——「爽樹」五月号

四、川合絹漱先生、万里子先生のご夫妻の作品（萬縁合同句集3 昭和62年12月25日発行 ￥4,500）
ご紹介します。

絹漱先生

小梅綻ぶ老いても腰の直き母へ
ソウルでの誕生日

青磁の艶に春愁孤独の酒をのむ
たんぽぽの小首すくめて笑ふことよ
長城沿ひに夕うぐひすの渡りゆく
花芍薬間に合はせ事せざる妻よ
芍薬の芽も歓喜の紅色苦任終ふ
虻宙にとどまり城跡の「時」遅々と

「時」広漠子牛を連れて田鋤く牛
「時」自（みづか）らは未来を生まず朝焼雲

草田男憂ふ日本の行手を灯蛾迷ふ
老僕は朝のうたたね露しとど
軍機一団低みに遊ぶ月襲へり
革命態下酷寒を啼く鳩時計
町食堂に冬来る椅子脚細きまま
冬浜に吹かれ立つ妻を詩友とし

万里子先生

啓蟄やぼつりと眩くまでに癒え
昇進の単身赴任や初黄沙

まんさくや鈿重なる石切音
花酔ひか未完の詩を抱き坊泊
雨だれのまた揺らしたる踊子草
書取やプール帰りの耳振りつ
球拾ひおさげ分目も日焼して
羅の背筋ふるはせ唱名す

火酒注ぎ罅せる氷や草田男忌
露の玉土粒裏（つつ）み大写し
蓑虫の外見つ回りつせり上がる
舞降りし鳥ごと動く浮氷
日面の一つ松ゆゑ雪豊か
山彦も美声の宣誓銀世界
鶴歩む宙に趾指締め地へ開き

五、同じ合同句集より眞希子さん（ご夫妻の長女）の作品をご紹介します。

人に倦み吹いて回すや風車
父の背に祭疲れの深睡り
巢作りに借金無しと蜘蛛身軽
悪ぶつてはにかみ隠す唐辛子
編み棒を速めて夫との議論断つ
風邪家族愛書それぞれ枕辺に
血縁てふ甘えがおもし重ね餅
節分や和毛の付きし卵買ふ

マフラーの撥ねあれば親し他人の背

一瞬の目算しかと寒の猫
青味帯び赤児の白目鯉幟
結婚で得し故郷に秋刀魚焼く
軍手の左右汚れで見分け福寿草
乃木夫妻像

夫は空妻は地見詰め冬木立
穏やかに叱られ涙桃の花

令和四年五月十一日

紀久男 記